

令和3年度 学校関係者評価・第三者評価報告書

奈良学園小学校

本年度は、新型コロナウイルスに対する防疫対策もあり、学校関係者評価・第三者評価の機会を次のように複数回設けた。

I 学校関係者評価・第三者評価委員会(幼小中高合同)

令和3年11月25日 9:40~12:00

令和4年3月8日 9:30~11:40

II 地域関係者による学校関係者評価委員会(小学校)

令和3年11月17日 8:45~10:00

III PTA 関係者による学校関係者評価委員会(小学校)

令和3年11月 8日 9:00~10:20

令和4年3月1日 10:30~11:45

それぞれにいただいた評価を次にまとめ、報告する。

I 学校関係者評価・第三者評価委員会

日 時：令和3年11月25日 9:40~12:00

場 所：大会議室

出席者：古川教育総括監，安井中学校・高等学校長，梅田小学校長，谷川幼稚園園長

菅田高等学校教頭，立花中学校教頭，小森小学校教頭，深石教諭（英語科の取り組み説明）

司 会：菅田教頭

記 録：小森教頭

1. はじめに（古川教育総括監）

まだまだ新型コロナ感染状況が落ち着かない中、各校種それに対応しながら進めてきた。特に、本校の特徴である異年齢の交流や宿泊等の体験が制限された中で進めてきた。そんな中でも学びを止めることなく、保育や授業を実施してきた。園児・児童・生徒も元気で、学校を閉鎖することもなかった。中には不安を感じて休まれる方や、濃厚接触者として休む場合もあったが、家庭と学校をオンラインでつなぐ取り組みを進める中で、教員の技能も熟達してきた。感染状況がこのまま落ち着いてくれば、今後は各校種の連携や、宿泊・体験学習も実施したい。現在のところ、小学校は日帰りに形態を変えて実施し、中高は今後宿泊を実施する方向で考えている。

本日は高校の英語の新しい取り組みの授業をご参観いただき、ご助言をいただきたい。また、各校種のいじめ対応に関する取り組みについてもご説明をし、ご助言をいただきたい。

2. 参観授業について（安井校長）

グローバルコンピテンスプログラムをご参観いただく。英語科の取り組みを、宿泊や留学といった単発で行う「グローバル体験」と、日常から英語を用いて思考する「グローバル教育」という2本の柱で組み立てている。本日のプログラム担当はジョン・ギル先生。今日は全6つのユニットのうち4番目のテーマ「自分が10年後に多様な生徒が通う教員になったら、どんなふうに変革するか」。

制服・ランチ・クラスルームの3つの観点から考え、アイデアをプレゼンする場面をご参観いただく。障害の有無や体の大小など、いろいろな人がいる中でのインクルーシブな観点から考える授業となる。参観後には、改めて意図などを説明したい。

3. 授業参観（9：50～10：40，Y2A）

4. 本日の授業および中・高の英語教育について

（安井校長）

本校の英語教育は、奈良学園登美ヶ丘中学校・高等学校中期計画の中の「戦略分野V」1)④に位置づけている。高校2年生でオーストラリアにある教育連携校に留学を経験するが、それまでに配付資料のシート6にあるような内容を実施する。さらにはシンガポールとの交流も検討を進めているが、コロナの影響でなかなか進まなかった。

こういったプログラムベースのグローバル体験に加え、日々の授業の中でグローバルコンピテンス、マインドセット系のプログラムをISAと連携して実施している。最終的には再来年度に中1～中3で実施。その後、オーストラリアでの英語によるプレゼンやディスカッションを進められるように組み立てている。授業ではTT形式をとり、chromebookを活用して実施している。コミュニケーション力を基本とし、自己理解や共感力、モチベーションといったグローバルマインドを身につけさせたい。今年度は試行的に実施している。

（深石教諭）

本日の内容はユニット4の終盤。ユニットは0からスタートする。ユニット0は地ならしのような内容。ユニットが進むにつれ、視点を自分の足元から地域、コミュニティについてと考える中で、ダイバーシティについて理解し、インクルーシブを進める心持ちなどを学ぼうというユニット構成になっている。本日はユニット4の最後でプレゼンだったが、普段はユニットごとに学ばせたいポイントを1つ設定。例えば「ダイバーシティについて」がテーマの場合、ことばで教えるのではなく、自然に体で理解していけるような設定になっている。グループ内のメンバーをどう巻き込むのかも体感しながら学べるプログラムになっている。従来の「行事があるからそのために事前指導する」や「行事が終わったから振り返りをする」というだけではなく、日常的な授業や活動でできることがないかを探していたところ、このようなプログラムがあることを知ったのが、導入への経緯である。

（安井校長）

基本は生徒中心のアクティブラーニング。ICT活用についても、今年からone to oneを実施しているので、本活動とリンクして進めている。将来的には、本校の生徒に合うようにプログラムをカスタマイズすることも含めて進めていく。

【授業に関する質疑】

（前田先生）

とてもおもしろい授業だった。テキストにも写真などがあり、引き込まれる。うまくアイデアを整理できる作りになっている。まず生徒が宿題をしっかりとってきていると感じた。全員プレゼンを考えてきていた。普段からそのようなサイクルができているのか。

（深石教諭）

参観いただいたのが、できているクラスだったという点もある。デバイスを1人1台もつことによ

り、どの子にとっても取り組みやすくなっている。今回の課題に至るまでに、前時や前々時で考えるきっかけを与えている。

(前田先生)

まずは自分で準備してくることが生徒に浸透していて素晴らしい。発表の際、しゃべるのに英語がスムーズに出てくる子がいたが、もともとの英語の力はどうか。

(深石教諭)

内進生の中には、発話に抵抗のないものが一定いる。特に会話に特化して進めてきた学年ではないので、そういった各自が持っている能力が出てきているのではと思う。

(前田先生)

発表しだすと、パパッと言葉が出てくる子がいた。こういう活動に慣れているのか、海外での生活経験があるのか。

(深石教諭)

小学校の段階でためていた部分をアウトプットしている。今回見ていただいた生徒の中には、海外留学等の経験がある子はいない。

(前田先生)

この授業については、ターゲットになる文構造などは？

(深石教諭)

特にない。グローバルコンピテンスプログラムは、英語の授業ではないと割り切っている。英語の技能熟達よりも、マインドセットを重視する。従って使う言語が日本語であっても、そういった内容を考えられるような授業にしてほしいと依頼している。授業担当者も日本語にもたけている。科目としては英語だが、他の授業とは立ち位置を変えている。

(前田先生)

そのあたりのバランスをどう考えているか。グループで話をする際、日本語でやっていいということだったが。生徒の発表時、多少間違ってもよいのか。

(深石教諭)

そこはあえて直さない。内容についてもあまり指摘せず、問題意識を向けることを重視する。準備段階でこちらから直しをすることもない。

(前田先生)

発表時に少し通じないような場合はどうするか。

(深石教諭)

プレゼンは今回が初めて。今後は、発表後にディスカッションも経験させないといけないと考えているが、現在はまだ行っていない。

【まとめ】

(前田先生)

発表のあとに、お互いにコメントやフィードバックがあるとよいと思った。内容重視で、それに対してどう思ったかを互いに言い合えるとよいと思う。

授業の中で自発的に英語を使っていくようにするにはどうするかについて、個人的には関心を持っている。そのためには、①国際的志向性（もっと知りたい、友だちになりたいなど）と、②コミュニケーション能力に対する自信（この場面では英語で発表できる）、の2つが重要だと考えている。今回

のテキストが国際的志向性を高める教材なので、意欲を高めるのに効果的なのだと思います。もう1つの自信については、練習を十分に重ねたり内容を理解していたりということが求められるが、今回の授業では自分で作成した原稿を発表するのである程度できていると思う。グループでまとめたものをいきなり発表になったので、心の準備と練習があればさらに堂々と発表できたのかと感じた。2つの要素のうち、国際的志向性を身につける方法は難しいが、うまくプログラムに組み込まれていて、先生方も上手に指導されていた。英語教育全体のプログラムについても、国際的志向性をいかに高めるかが6年間で力がついていく組み立てになっている。普通の英語の授業はどのようになっているのか。(深石教諭)

グラマー重視の授業。1人1台のデバイスがあるのは今年からなので、中1はコミュニケーションな授業になっている。その一方で、外部試験でリーディングの点数が思うように出ないという悩みもある。高1のⅡ類では従来の取り組みと異なる取り組みをしている部分もある。

(安井校長)

内進生は小1から発音・発語重視で指導しているので、それをどうつないでいくか。今年度から、読んだ音声を自動採点するしくみなどを中1から導入している。

(前田先生)

中学も新学習指導要領になり、教科書にもQRコードが多くみられる。そこで音声や動画が流れる構成になってきている。そう考えると、タブレットやスマートフォンは必須となってきている。高校も新教育課程になっていくので、デバイスを使ってこそ生きてくる教材になると予想される。

5. 本学園のいじめ対応体制に関する学校評価について

(1) 幼稚園について (谷川園長)

園においては、明らかにいじめになる事例はないが、いじめ防止の取り組みは進めないといけない。自己主張する時期なので、道徳教育が大切だと考えている。ことばで教えるのではなく、体験的に教えることが大切なので、教員も研修を進めている。時には口論やけんかになることもあるが、その時を逃さずにその場で解決するように意識している。それぞれの思いを受け止め、子ども同士では解決が難しいことにも教員が入ることで、互いに思いを伝えるように指導する。本園は受験して入園してくるため、保護者も高学歴で子どもたちもプライドが高い子が一定いる。自己主張できる子はよいが、それを言わずに家庭に持ち帰り、保護者に自分の都合のよい伝え方をする園児がいる。保護者も弱みを見せるのがいやなケースが多いため、直接園に訴えてくるのが日常茶飯事である。双方の思いをくみ取り、寄り添うことが大切ではあるが、なかなか大変である。自尊感情や規範意識を育てることが、いじめを未然に防止するためには必要であると考えている。発達の未熟な子もいるので、専門のセンターの人にも話を聞いてもらい、対応をしている。

(2) 小学校について (梅田校長)

小学校も中期計画の「安心・安全」に項目として位置づけている。職員全体にも核として取り組むことを共有し、取り組みを進めている。防止基本方針の最後にあるフロー図が、具体的な対応を示している。いじめが発生した時にはしっかり対応するのは当然であるが、小学校は、規範意識のベースを身につけ、さまざまな判断力を入れ込み、使えるようにする発達段階である。発生に至る前の未然防止、初期対応に重点を置いて取り組みを進めている。

生徒指導部では「いじめ未然防止プログラム」を作成している途上である。低・中・高の発達段階

でどのような考え方を身につけ、どのような場面で考える場を設けるかということ、さまざまな教科や活動の中で身につけさせる方策を構築している。改めて見える化していくことで、小学校の強みを示すように考えている。

具体的には、

①外部講師等からの話

今年度高学年ではネットモラルについてドコモのお話、弁護士に来てもらっての人権の話、4年生では学校の風土調査を活用し、自分たちの状況を把握するなど、学年に応じて場面を設定している。道徳では各学年での教材をどう扱うかをプログラムに落とし込み、位置づけている。

②合理的な配慮についての検討

いじめの事象は、合理的な配慮が必要な児童への対応がベースに必要な場合がある。そういった特別支援についての対応も行っている。

③「気づきシート」の活用

校務システムの中で「気づきシート」を活用し、各学年での事象を共有している。

④教員ステーションへの教員常駐

⑤校内委員会の定期的開催（必要に応じて臨時開催）

この他にも「チェックリスト」を作成し、本人への聞き取りや保護者への対応など、漏れのない対応が初期においてできるようにしている。今年度アンケート調査でもいじめに関する回答が出てきたが、その都度対応することで、継続した事象にはなっていない。この体制を継続していく。

（3）中学校・高等学校について（安井校長）

いじめ防止基本方針改訂に伴い、今年度方針を改訂した。いじめの認知についての捉えが重要、いじめの定義を改訂した。いじめの解消についても新たに見直した。解消に至っても再発する可能性があるため、解消についての考え方を付け加えた。

アンケートは年2回実施している。6月実施の際も、いじめの定義について生徒指導部長から放送で確認している。アンケート実施後の集約会議を大切にしている。事象報告書の一覧を提出してもらい、今もいじめが継続しているものについては事象を一つ一つ一覧表にして提出してもらっている。集約会議を行い対応することで、重大案件には至っていない。

「気づきシート」を今年度から導入し、危機レベル0～3まで設定し、閲覧できる範囲を拡大していく。レベル0または1程度の内容も細かく入力し、対応する取り組みを今年度からスタートした。いじめ初期対応チームも昨年度からスタートした。校内巡回指導サポートチームにより、特別支援教育コーディネーターやいじめ対応の経験豊富な教員を配置している。また、道徳教育の時間も昨年度よりしっかり確保するように進めている。

【いじめ対応に関する質疑】

（前田先生）

Siemsは具体的にどのような内容・対応？

（安井校長）

生徒とのやり取りの中で気になる様子などを報告したり、発達アンバランスがある生徒については授業における注意点などを周知したりする。特別指導の内容の周知などにも使われる。管理職はすべて閲覧することができる。対応が必要な問題となれば、チームで対応する。

(前田先生)

文字で残るので確認もできるし、重大事態に至る前に気になるところが共有でき、未然防止等にも非常に有効だと感じている。

(梅田校長)

その日の動きがみられるトップ画面で、気づきシートの有無を確認できる。小学校では、対応はその日のうちにすることが原則。対応済の事象に対して、他学年や教科担当と共有するのが一番大きな目的。有効に作用していると考えている。

(前田先生)

ネット上でのいじめなども問題だと思うが、そのあたりは。

(安井校長)

SNS上のやりとりによるトラブルというのものもある。特定して指導できるものもあれば、そうでないものもある。生徒側にはいじめという感覚はほとんどなく、日常茶飯事的な活動の一部ととらえている。保護者にも家庭での使い方などについて協力を仰いでいる。本人の自覚を促しにくいタイプの生徒もいるので、繰り返し継続して指導している。心配な事例があれば、生徒の方から申し出てくるケースもある。

(梅田校長)

学校が管理するPCの中では、一定のパトロールを行うことである程度ひっかかってくる。個人となると難しい。その分、情報モラルの指導で対応している。

(前田先生)

見えにくい部分だと思うので、対応は難しいと感じる。生徒指導は予防的指導・教育が大切だと改めて感じさせてもらった。初期対応についてもシステム化され、連携がとりやすい形で整えられていると感じた。状況に応じ、臨機応変な対応が必要だと思う。学校内はもちろん、卒業後もいじめを行わない、つくっていかない人に育ててほしいので、未然防止の取り組みは非常に大切だと感じた。

(古川教育総括監)

教育大では、どのような取り組みをされているのか。

(前田先生)

いじめの事例を持ち込んでのディスカッションや、理論的な学びも行っている。未然防止、予防的な取り組みをどのようにするかの科目もある。それをどれだけ実践に活用できるかが重要。実習で経験する範囲は限られるが、生徒指導に関わって学校でどういう取り組みをしているかなどは、実習の振り返り場面でもそこにフォーカスして考えさせる場面もある。

学生の中でもいじめやトラブルも同様に、SNS上でのトラブルもある。

(古川教育総括監)

保護者対応など、大変な部分もあるが、教員志望者は昔に比べて減っているか。

(前田先生)

本学の場合、大学入学時から卒業時までには教員志望者が1割程度減る。その理由は他の進路が見つかったため、現場の大変さを目の当たりにして減ることはあまりない。逆に、実習を通して実際に子どもたちと触れ合う中で、教員志望の気持ちを強めるケースが多い。

日 時：令和4年3月8日 9：30～11：40

場 所：大会議室

出席者：古川教育総括監，安井中学校・高等学校長，梅田小学校長，谷川幼稚園園長

中野事務長，菅田高等学校教頭，立花中学校教頭，小森小学校教頭

司 会：菅田教頭

記 録：小森教頭

1. 幼稚園の取り組みについて（谷川園長）…PP3星組の動画を視聴。

子どもたちは歌と踊りが大好きで、楽しんで取り組んでいた。コロナ禍がなければ、ぜひ保護者の方にも見ていただきたかった。感染症対策のため、以前は園のものを着回しとしていた衣装も自分で買い取ってもらっているの、家庭でも衣装を着た演技も見ていただける。

（前田先生）

動画視聴にすることで、家庭でも見ていただくことができるのがよい点。どの子もしっかりと発表できており、一人一人の言葉がはっきりしていて、非常に聞きやすかった。今回見せてもらった「不思議の国のアリス」は、高校生の英語のテキストでも出てくる。そんな機会に思い出してくれるとうれしい。

2. 幼稚園の令和3年度評価について（谷川園長）

今年度もコロナ禍で行事がなくなり、お泊り保育もできなかった。そんな中、保護者にも満足してもらえ、園児も意欲が発揮できるように、運動会やマーチングフェスティバルなどを行ってきた。また、学校関係者評価委員の方に保育を参観いただいた際、行事に向けた教員の前準備の大切さを実感していただくことができた。

保護者アンケートでは、コロナ禍の中で工夫した保育を行ってもらい、よかったという感想を多くいただいた。自尊感情や規範意識などを身につける取り組みを、幼稚園が進んで行うことは大切である。普段の保育の中から、きまりの大切さなどを守れるようにしていかなければならない。去年は卒園式の場で、将来の夢を英語で語る場面があった。英語の歌などが大好きで、発音もすばらしい。小さいときからの感性はすばらしいと思う。はじめは大人しかった子が、卒園式で夢の語る際に堂々と saying、成長を感じた。

（前田先生）

3年保育のほとんどがコロナの影響を受けたと思う。大学でも同様に、学生同士の関係作りで苦労した部分が多い。幼稚園で見られたコロナの影響は他にあるか。

（谷川園長）

オミクロン株以前は、マスクを全員必須とはしていなかった。全員マスク着用にすると、発音の仕方がわからない子が増えたように思う。人の話も聞きにくいし、自分の発音の仕方もわからない様子である。特にその状況が年長まで続くと、専門機関に相談に行ってもらうなど、気にかけていけないと感じている。一方で、手の消毒などはずいぶん気をつけるようになった。3歳で発音しにくい子は、今後影響が出てくるのではないかと思われる。

（前田先生）

子どもが発音を覚えるのは、幼児期でも一番大切なところである。英語の授業でも、マスクをして

発音しても伝わらない。かえってオンラインでマスクなしでするほうが伝わりやすい。マスクをした状態で話す上では、非常に難しい。

3. 小学校の令和3年度評価について（梅田校長）

今年度から全職員に中期計画を下ろし、重点的な項目を意識してスタートできた。学びを大きく変えていかなければならない段階であることを、職員一人一人が意識できた。その意識を教科や教科外指導に生かすことにより、いかに子どもたちを自立につないでいくかという柱を明確にしてそれぞれの指導や校務にむかうようになり、ベクトルがそろってきた一年になった。

学校関係者評価や保護者アンケートの中で多かったのは、コロナ禍でできないことが増えてきているが、体験をしっかりとらせてほしいという意見であった。行事を通した経験がほとんどできなかったことが惜まれる。その分、日帰りで実施した学年やオンラインでつなぐ経験を実施した学年もあった。一例を示すと、広島とつないでお話を聞いたり、ハワイとつないで現地での体験をさせていただいたりした。ハワイ姉妹校との関係性は、コロナ禍以前より密になったように思う。直接現地に赴く体験をできない分、現地に行ったような体験をしてもらうことについては、一定の評価をいただいていると考える。

学びの様子に変化していることを発信しなければならないと考え、オンライン学習はもちろん、学びの場を見ていただく機会として3学期もオンライン参観を実施している。様々な機器を登翔会などからもご協力いただき、よりよい画像や音声で配信でき、保護者の満足度にもつながっている。

地域関係者による評価によると、挨拶をしてくれる子が増えたこと、地域で見守っている子たちが一生懸命に学習する様子を見られてよかったこと、遅刻の子がいるのが気になることなどがあげられた。コロナ禍で生活リズムが崩れたり、学校に来にくくなったりする子がいるのは現実である。家庭ともしっかりつながり、学校に来ることができるような取り組みや、よりよい中学校以降の進路決定への相談などといった、個別の取り組みも重ねてきた。

先日の学校関係者評価においては、兄姉に比べると漢字や計算の練習量が減ったのでは、という意見があったが、実際の各学年の掲示物や学習の様子を見る中で、学習の核を自分の考えをしっかりと持って発表したり、考えを書いたりといったことにおき、6年生の段階でどのような力を身につけさせたいのかをお伝えすることで、単に計算の量などだけではなく、中身を重視していることについて納得いただいた。そのような取り組みの裏にある理由を今後発信してもらえると、より一層保護者の理解が深まるのでは、というご意見をいただいた。保護者に対する発信や入学希望者への発信は重要である。学級の様子などを伝える中で、学校が現在考えていることの発信の仕方を考えなければならないと考えた。今後の重点的な取り組みを確認し、次年度につなげていきたい。

（前田先生）

体験活動をつくりだすのは、コロナ禍では難しい。その分、オンラインを含めて工夫すると、密度が濃くなるという説明が印象的だった。大学でも体験的な取り組みの代替として取り組む際に、オンラインを活用しながら回数を増やしたりして密度を濃くすることが大切だと感じている。それを活用して濃い教育内容にしているのがよかった。オンライン参観などで、機器もよいものを活用してもらえるとと思う。

（梅田校長）

オンライン参観については、ただの発表に終始するのではなく、子どもたち同士のやりとりをしている場面を見ていただけるように柱立てをして、授業を組み立ててもらっている。

(前田先生)

研究会なども360度カメラで撮影し、VRゴーグルを活用する工夫があると聞いている。試行錯誤の連続である。直接体験できない分、密度を濃くしているのはすばらしい。中期計画を共有して実施されているのもよいことである。教員間で目標や計画を共有した影響はどうか。

(梅田校長)

取り組みの上で、何に重点を置くかがはっきりしてきた。学年や分掌の年間計画をどのようにすすめるかを、中期計画をもとにして考え、進捗を学期ごとに報告する場を設けた。学年や分掌の進捗や、中期計画で求めていることに対する取り組みが共有できるようになった。また、それに対して、管理職からのコメントを加えることもできるようになった。

(前田先生)

大学でも中期計画が示される中で、自身の振り返りを報告している。その結果、意識するようになり、進捗も意識するようになる。大事なことだと思う。

4. 中学校・高等学校の令和3年度評価について（安井校長）

浸透はなかなか難しいが、会議におけるさまざまな報告の中で中期計画を意識させるようにしている。学校の大きなスローガンとして「子どもの伸び率日本一」を掲げ、どのようなプログラムでどう伸ばしていくかを考えている。

保護者の関心事は、やはり最終の進学指導である。中1からどのような受験学力を身につけるかを意識した授業で、フォローアップもしっかりと行っている。本校はI・II類制のため、類によって差が大きい部分もある。教員のフォローはもちろんだが、大手個別指導塾とも連携して「尚志館」を動かしている。今までは希望者対象だったが、次年度から中1生から全員登録制とする。そうすることで、自由に自習室も活用し、チューターにも質問できる。卒業生もチューター登録できるため、人材バンクとして活用している。今年初めて「卒業生によるキャリアトーク」を行い、オンラインで受験勉強や企業の研修内容などを語ってもらった。合格体験発表会も実施し、進路指導の対応を行っている。

各学年の学習到達度を設定し、一定の到達度に至らない場合のフォローなどを行ってきた。大学進学後も見据え、コミュニケーション力・協働力などを育てるために探究学習を設定している。中2から本格的に実施しているが、今年度は全国の学校が集まるプレゼンコンテストに本校から1チームが選ばれ、参加させていただいた。中・高同じ場での発表だったが、大きな刺激をいただいた。次年度は自分でテーマを設定し、自由探究を行う。評価については、現在ルーブリック評価表を作成している。類別ではないグルーピングにより、探究活動を行っている。Y2で取り組む探究学習では、最終的には英語で発表できるようにし、Y3時にオーストラリアの高校で発表することができればと考えている。前回のGCPの取り組みと、探究活動を関連させながら進めていきたい。

英語で必要な力を考える際には、自分の考えに理由と責任を持つことが大切だと考えている。これがグローバル人材の条件である。新たなことを創造的に提案する自由な発想力を発揮し、臆することなく発表する。GCPについても、今後は既存のプログラムを本校のめざす教育に向けてカスタマイズしていく方向で考えている。SSH校の研究発表会への科学部の参加や、WWLの研究発表会で英語による発表を行うなど、幼小中高の中で安心して過ごしながらか、外に出る機会をできるだけたくさん与えていく。

コロナ対応の面では、第6波で本校から陽性者が50名ほど出ている。そのような状況もふまえ、

各教室にはオンライン対応の機器を備え、自宅待機生徒にはオンライン授業で対応しているが、まだ保護者の求める授業公開までは至っていない。先日の学校関係者評価委員会でも、保護者も改めてGCPの授業を見ていただき、高評価をいただいたが、広く発信してほしいという要望もいただいている。広報活動も重要で、オンライン説明会や見学会を頻繁に発信した。今年度の出願者も800名を超えるほどになった。ウェブ媒体での広報活動を、ターゲティング広告などに切り替えて入口を固め、6年間の出口に向けて指導を重ねることで「伸び率日本一」を目指している。

保護者の意見では、それぞれの類ごとにきめ細かな補習・充実講座体制を望む声や、教員やクラス間での差異を指摘する声もいただいた。

(前田先生)

アンケートも肯定的な意見が全般的に高いと思う。M2からM3段階のギャップはどうか。

(安井校長)

160名中40名ほどが内進生。一定のギャップはあるが、小学校での指導や内進生のアドバンテージを活かし、中学校でも引き続き指導していく。特に英語指導では、小学校の指導レベルに中高教員も驚いている。具体的にそういう子たちは英語のアドバンス、そうでない子はスタンダードで学ぶような体制を整えている。他教科についても、カリキュラム連携に取り組んでいこうと考えている。

(前田先生)

小学校と中・高のアンケートを比較しても、それほど大きなギャップは見られない。内進生にとっては段差が少なく、うまく接続した教育が行われていると感じる。どんどん外で発表させる機会を設定するのはすばらしい。探究学習についても、積み上げていくことが最終的にどのような力につながるのかをイメージできれば、下の学年もより具体的なイメージが持てるし、中学生も動機づけにつながる。自分の目標にする姿を実際にイメージすることができれば、長期的な動機が強くなっていくとよく言われるが、大事なことだと思う。

広報活動も戦略的に用いられている。LINEの登録は進んでいるか。

(安井校長)

確実に広がっている。LINEは当初登録アカウント数の制限もあったが、登録希望者が多数になったために広げていっている。ターゲティング広告なども今年から導入している。説明会などは人数制限があるため、他の方法を模索して取り組みを進めている。

(前田先生)

卒業生によるチューターもいい取り組みである。

(安井校長)

後輩のために、と思ってくてくれるのはありがたい。現在は中学生対応が多いが、今後は受験指導なども担当できるように整備していく。大学探訪も今年度は実施できなかったが、その大学に進学した自分たちの先輩が語ってくれることで、モチベーションにもつながっていく。

(前田先生)

大学でも卒業生が教員として就職し、学級の子どもたちと接している様子を学生に見せることがある。授業の様子を視聴することにも意味があるが、授業前後で子どもたちと触れ合う様子を見ることで、学生も教員就職への意欲が高まるようである。先輩の姿を見るのは非常に良いのだと思う。

5. 質疑

(古川教育総括監)

4月より奈良学園大学人間教育学部が登美ヶ丘キャンパスに統合される。教学面での打ち合わせが行われ、学生たちとの交流も今後増えてくると考えられる。教育実習だけではなく、行事面での交流もある。その中で、何かアドバイスがあればお聞かせいただきたい。

また、中学入試では、本校志願者は女子大附属や教育大附属、一条高校附属との併願が多い。紗来年度には奈良国際高校附属中学も開校する。外国語や探究などの取り組みが、そうした学校でも特色となっている。その中で本校としてのアピールをどのようにしていくかを考える必要性を感じている。

免許更新制度がなくなる。私学ではどうしても学内で研修を行うことが多くなるが、更新制がなくなり、教員がますます情報交換・研修への難しさはあるがどうか。

(前田先生)

大学との連携については、本学でも課題になっている。本学にも附属校はあるが、日常的な連携体制をどうするかは課題である。免許更新講習については、大学側でも新たに提供できるものを考えないといけないということで、現在検討中である。公開講座を増やすことはもちろんだが、どういったテーマがよいのかを議論している最中である。どのような研修の機会が望まれるかを、むしろ現場の先生方から意見をいただきたい。大学として独自に提供するものは作っていききたい。

また、近くに特色のある学校ができることで、地域全体で活性化できれば良い。

(古川教育総括監)

国際高校がWWLの拠点校で、本校は連携校。学校の特色も出しあいながら、互いに相乗効果でグレードアップしていければよい。

(前田先生)

交流が活発になる方が、魅力が増すかもしれない。共存共栄で進めることで、地域も活性化していくのではないかと。校内だけの教育ではなく、外に教育成果を発信できる交流できる場として、国際高校は一つのプラスになるのではないかと。

6. まとめ (前田先生)

幼稚園の取り組みから見せていただき、一人一人の子どもたちが自分の役割を意識してやりがいをもって発表している姿が印象的だった。臆さず自分の表現をしている姿から、普段の保育や教育の結果なのだろうと思うと、非常に質の高い保育をされている様子がよく分かった。保護者に対しても、今の時代だからこのように見ていただく、というのは強みだった。マスク着用と言葉の発達の悩みについても、外国語教育を進める上でも感じている課題である。

小学校では体験的な活動が難しい中でも、状況をプラスに生かす取り組みや、保護者の方々とのコミュニケーションを密にとっていること、保護者アンケートからも満足度の高さは印象的だった。中高にわたっても全般的に同じような傾向がみられるのは印象的だった。家庭学習についても、コロナ禍の影響がどの程度あるかわからないが、家庭学習のパーセンテージがあがってきているのは大切なこと。主体的な学習者を育てることができていると感じる。

すべての面において、質の高い教育や個々へのフォローアップも行っていることがよく分かった。

Ⅱ 地域関係者による学校関係者評価委員会

1. 学校関係者評価実施日 …令和3年11月17日 8:45～10:00

はじめに中期経営計画をもとに、コロナ禍の中で宿泊学習にかわる活動をリモートで行っている現状や、ダスキンと協力しながら衛生的に清掃ができるような指導方法や清掃用具の導入などを行っていることなど、今年度の特徴的な取り組みについて説明した。また、過日行われた警察や行政との合同安全点検の様子や、今後の対応についてもお伝えした。

その後、実際の授業や校舎内をご覧いただき、本校の今年度の取り組みに対するご意見を求めた。

2. 評価者名 …天野イザベル文子

(登校指導サポーター, 奈良市立登美ヶ丘北中学校区少年指導協議会委員, 奈良市民生委員)

3. 評価結果

【大項目】

I 教育活動に関するもの

【中項目】

(2) 教科指導

・子どもたちは熱心にテーマに向かっているということがいいなあと思った。どのクラスも自然に学習に向かっている。

(6) 生徒指導

・以前(北中校区指導委員として立哨していたとき)より挨拶がよくなってきた。挨拶をよくしてくれる子どもの学校の中での表情も同じで、楽しく学習に臨んでいた。

【大項目】

Ⅱ 学校経営に関するもの

【中項目】

(3) 安全管理

- ・登校指導時、例えば自転車が来ても乗っておられること自体が悪いことではないので、子どもたちには「確認をしよう」という言い方で言葉を投げかけている。
- ・駅近くを歩くときにも、バイクなどが結構スピードを出してくることもある。このときにも「しっかり確認をしよう」と声かけをしている。
- ・登校班のリーダーがきちんとやってくれることもあるが、少しやんちゃな子のグループもある。
- ・時々遅刻の子どももいて気にしている。先生方に連絡してつなぐようにしている。

(4) 保健管理

・新型コロナウイルスへの対応で、子どもたちはマスクで表情が見えないことが心配だが、マスクが取れるときを楽しみにしていきたい。

Ⅲ PTA 関係者による学校関係者評価委員会

1. 学校関係者評価実施日 …令和3年11月8日 9:00～10:20

はじめに、実際の授業や校舎内の様子をご覧いただいた。その後、新型コロナウイルス感染対策等も含めた今年度の取り組みに関して概要の報告を行い、本校の今年度の取り組みに対するご意見を求めた。

2. 評価者名 …山本晴美, 山本寿代 (PTA 関係者)

3. 評価結果

【大項目】

I 教育活動に関するもの

【中項目】

(1) 教育目標・教育計画

- ・子どもたちが何をするか納得し、楽しそうに授業を受けている姿が印象的だった。先生方の準備の中で、それぞれの学習活動や行事を何のためにするのかを整え、子どもたちもそれを理解し、納得して取り組んでいることが、掲示物などからも伝わった。

→活動に向かう際に目的を明確にし、振り返りができるように教員も意識するようにしている。

(2) 教科指導

- ・小学校ではいろいろな経験ができるよう、工夫して組み立ててくれている。その経験を活かし、それ以降にやりたいこと見つけられるようにつなげて行ってほしい。
- ・学年によっては広島やハワイの宿泊学習もなくなり、しかたがないと思う一方で、そういう行事を通した成長がなかったのは惜しまれる。

→全く同じ活動を行うことは難しいかもしれないが、オンラインの活用や仲間とともに過ごす経験を設定し、そこから学べる機会を設けたい。

II 学校経営に関するもの

【中項目】

(3) 安全管理

- ・アルコール消毒や黙食など、徹底できていると感じている。感染拡大は心配されるが、小学校の時期にしかできないこともあると感じる。いろいろな考え方があるので、全家庭が100%納得するのは難しいかもしれないが、万全の対策をしていただきながらであれば、なるべくいろいろな行事などを経験させてあげてほしい。

→3学期実施予定のP尚志祭も、感染状況によって対応できるように何段階にも分けて検討を進めている。

(5) 地域等との連携

- ・オンライン参観はよかった。画面割りも工夫してもらって、家に居ながらにしてその場にいるような雰囲気での参観できた。体育参観で実際に子どもたちの様子を見られたのもよかった。

→今後も感染状況を確認しながら、できるだけたくさんの経験ができる場を設定する。子どもたちにとっては、やはり自分のがんばってきた成果を出し切る場が必要だと改めて感じた。大きな目

標に向かって努力することや、それを見ていただける機会は、今後も意図的に設定したい。

1. 学校関係者評価実施日 …令和4年3月1日 10:30～11:45

はじめに、P尚志祭の動画や授業の様子をご覧いただいた。その後、保護者アンケートの結果などをもとに取り組みに関して概要の報告を行い、本校の今年度の取り組みに対するご意見を求めた。

2. 評価者名 …山本晴美, 山本寿代 (PTA 関係者)

3. 評価結果

【大項目】

I 教育活動に関するもの

【中項目】

(2) 教科指導

- ・ 計算や漢字の練習などの量が以前に比べて減ったような気がする。時代に合わせて変化するのは当然だと思うが、理由の説明があるとわかりやすい。
→力をしっかりとつけるという点では、以前と変わっていない。繰り返しの練習ももちろん重視するが、近年はP1段階から「自分の思いや考えを書く」ことを今まで以上に重視してきた。今後の社会で求められるものの一つに、自分の意見を他者に伝える力がある。国語科だけではなく、あらゆる教科を通して6年間で系統的に身につけられるよう、指導を重ねている。
- ・ 特に低学年においては、体験的な授業が多くよいと感じる。
- ・ コロナ感染不安などの場合、オンラインでの対応が早いので助かっている。少し体調が悪くなった時なども、安心して休ませることができる。オンラインの映像や音声もクリアに届くため、比較的長時間であっても受けやすい。
→ICT 機器の活用を通して学びを進めるとともに、従来の学習スタイルや体験的な活動なども重視して学習を組み立てている。映像や音声の配信にあたっては、登翔会より寄贈いただいたマイク等の機器を大変有効に活用させていただいている。「コロナ対応」として始めた学びのスタイルを、今後元通りに戻していくのではなく、子どもたちの学びに効果があることについては継続していく。
- ・ 学年によっては、計算ドリル用のノート（問題にあわせてノートの使い方が示されているノート）を使っていたり、プリントでまとめられたものを切り貼りしてノートを作ったりする場合がある。どちらが良い悪いではないが、ノートを工夫してまとめるスキルが育つのか心配である。
→算数科でも、自分の考えをノートに書きながらまとめていくことの大切さについて、系統的に育てていこうと考えている。しっかり書く部分と、別の活動に時間をかける部分とを使い分けながら、目的に応じてよりよい方法を選択していきたい。

【大項目】

Ⅱ 学校経営に関するもの

【中項目】

(4) 保健管理

- ・アフタースクール利用時に消毒を促したところ「自分はもう感染したから大丈夫」という子がいて困った。たとえ自分がかかからなくても、周りにも感染を拡げないという意味についても話している。→学校においても、陽性者が出た際にそのことが原因で傷つけるような言動がないかどうかは、常にアンテナを張っている。幸い今のところはそのような事例はないが、ご指摘のことについては改めて教員間でも共有し、指導につなげたい。

(5) 地域等との連携

- ・学年初めのオンラインによるクラスや担任発表は、ぜひ今後も続けてほしい。
→臨時休校等がきっかけで始めた取り組みではあるが、今後も続けていく。